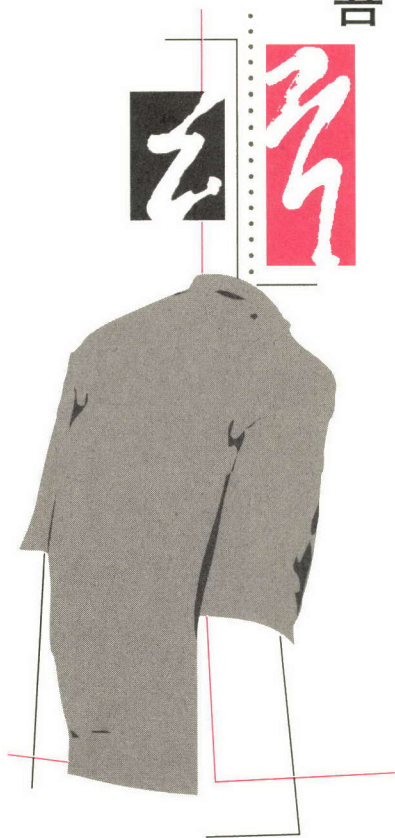


# キレイるの

サーガラ叢書 5

# 背景

講師 小此木啓吾



# 現代の子どもものの心

真言宗大覚寺派青年教師会



## 刊行に際して

近年、子どもの問題が取り沙汰されています。不登校、社会的ひきこもりなど、子どもの周辺にはさまざまな現象が現れています。これらに対して、大人は自らが子どもであった時代を呼び起こして批評するわけですが、現代の子どもたちが置かれている状況を考える、単純には自らの視点のみで判断するべきものではないと思われます。私たちは、直接に人と関わる立場にある者として、子どもの問題を見直してみたいと考え、平成十年にこの講習会を開きました。

平成九年、神戸で起こった連続児童殺傷事件（酒鬼薔薇少年の事件）は、少年犯罪が凶悪化していることを示したものです。しかし、その背後にある問題がよく掘り下げられないまま、マスコミ報道が先行した観があります。

本書にも記されているように、アメリカでは、児童が銃をもって大量殺戮を行ったという報道がなされています。日本の社会ではそんな状況にまでは至っていませんが、今後は予測が困難な事件が起こるかもしれません。そのとき、私たちは問題を起こした子どもの

背景を探り、家庭環境、学校教育へとその原因を求めようとしますが、単に指弾の対象を求めていくことになりかねません。そのような責めを求める状況に陥るのではなく、どのような人間を育てるかを社会全体で考えていくことが大切です。現代の社会状況では、人間関係は（しなやか）なものとはいえません。（しなやかな）人間関係をつくっていくこと、人間本来の持つ如来蔵すなわち仏種を萌芽させ、仏性を育てることが、仏教に、今求められているのではないでしょうか。

本講演では、小此木啓吾先生に日本の子どもたちが置かれている状況を本質から論じていただきました。そして、対談で、私たち僧侶がどのような行動をとるべきかを廣安宗務総長と共に考えていただきました。お二人に厚くお礼申し上げます。

合掌

平成十一年三月

会長 禰宜田 龍真

目次

刊行に際して 1 禰宜田 龍真

キレるの背景 現代の子どもの心 5 小此木 啓吾

親の過保護 7

家庭教育がない！ 18

恐るべき子どもたち 20

みんなが自分のことしか考えられない 24

マイホーム主義がもたらしたもの 28

歴史教育の必要性 33

小此木先生に聞く 41 聞き手・廣安 俊道

あとがき 61 三矢 弘文



キレるの背景

現代の子どもの心

この講演は平成十年五月に行われたものです

## 親の過保護

今日のタイトルは「現代の子どもの心」です。

最近では、酒鬼薔薇少年の事件から始まって、学校の先生をナイフで刺し殺すという中学生の事件もありました。今、こういった中学生の問題が非常に世の中の関心を集めています。もう一度、現代の子どもの心を理解し、教育を考え直して見る必要があるのではないかとということで、今日の話題を選びました。

最初にこれを言ってしまうと、何となくしらけてしまうかも知れませんが、日本の新聞、テレビなどマスメディアの情報というのは、どういうわけか偏っていると思います。

つまり、どういうことかと言うと、今、日本は、非常に子どもの心が荒廃し、親子関係も悪くなってきたいて、家庭の教育の機能も衰え、何となく「困った困った」という風潮になっていきます。確かに、日本社会の歴史的な段階から見るとそうですが、これを国際的な視野から見ますと、必ずしもそうではないんです。

国際的な認識から見ると、日本が一番平和で、治安もよく、豊かで家族も安定していて

親子関係も良好です。子どもの問題でも、少年の非行も少なく、非常に安定した国です。これは確実なことです。その認識を誤つて、マスメディアの扇動に乗らないということが非常に大切だと思います。

松田聖子さんが結婚した、日本がワールドカップへ出場したなど、とにかく記事にしたことを鵜の目鷹の目で探して、それを拡大し、針小棒大に深刻ぶつたり、大騒ぎをするのがマスメディア社会です。むしろ、こういう問題を考えるとき、今日のようなテーマが登場するということが、そもそもマスメディアの流している情報に、我々がすでに乗せられている部分があるということを認識しておく必要があります。マスメディアの情報を離れて、もっと現実をありのままに見るといことが、まず必要だという気がしています。

マスメディアにとっては、松田聖子さんの結婚もナイフで先生を刺すのも同じで、要するにどちらが視聴率が高くなるかだけのことです。ある意味では、そこにむしろ日本の社会の病理があるかなという気がします。たとえば、私はアメリカ人と交流が多いのですが、この間もアメリカの精神科医の先生が日本に来たときに、「日本では中学生がナイフを持って、先生を刺したりする事件があつて大変なんだ」と言うと、そのアメリカ人は、にやにや笑つて次のように答えたのです。「ナイフで結構ですね、アメリカだったら全部ピストル

ですから。日本はナイフで騒ぐんだから、本当に恵まれてますね」。

アメリカでは、今年だけでもピストルの学校内発射事件で死傷事件が起こり、十何人、犠牲者が出ています。アメリカの都市部の中学では、ほとんど教育機能が働かず、散弾銃を持った警官を学校に配備して、ボディガードをしながらでない授業ができない。特に相手はピストルですから、非常に恐ろしい。まず、この差を認識しておくことが必要ではないかと思えます。

ロサンゼルスから来た先生が言っていました、恐いのはハイウエーを走っていてスピードを緩めると、いつ中学生にピストルで撃たれるか分からないことだそうです。中学生の中には、ハイウエーを走る車のどこにピストルの弾が命中するかを、ゲーム、ギャンブルでやっている連中がいるという状況で、日本の話とはかなり様相が違います。

これは学校の試験問題によく出るので、アメリカの代表的な家族は？という質問に、「核家族」と答えると落第なのです。家族の状況を見ても、アメリカでは、お父さんとお母さんがいて、子どもがいて、一生、親子で暮らすという家族は、もはや少数派になっていくのです。

この前、慶應の小学校の生徒が、日米弁論大会でアメリカに行きましたら、アメリカの

子どもたちが出してきた討論のテーマが、親が離婚したとき、君はどっちの親がいいかというものでした。残念ながら、日本の小学生は、みんなで公の場で親の離婚を深刻に討論するという経験がまだそれほどないものですから、非常に困りました。その時にアメリカの先生が、この小学生たちは、大体、小学校を出るまでに親の半分が離婚をする、だから、子どもたちにとつては、いつ親が離婚をするかということが、最大の不安の種で深刻なものなのです、という話をしていました。

また一方では、継母、継父による子どもの虐待が、大体、日本の百倍くらい多い。圧倒的な虐待家族です。クリントン大統領が、この前の選挙の前に、わざわざ、自分のお母さんは三回離婚、結婚している、二回目のお父さんがアルコール中毒で、酔っぱらって自分をライフルで撃とうとした、つまり自分は虐待された子どもなんだということを告白しました。しかし、これが選挙に有利に働くのがアメリカという国なのです。クリントンは、やはり我々の仲間なんだと考える子どもの方が多数派になってしまっているという現状があります。

今、日本の景気が悪くてアメリカがいいものですから、アメリカの方が良さそうなことが言われていますけれども、これはとんでもない話です。日本の方が遥かにいい。

千二百兆円もお金を持っていて、世界で一番金持ちで、治安も一番良くて、家庭も安定していて、学校教育も順調だということから話を始めないとだめです。我々日本人は、何か非常に自信喪失に陥っていると思うんです。かえって気をつけなければならぬのは、この自信喪失の方です。

ちなみに、今、日本の少年非行は、全体的には減少しているのです。ただ、たまたま、酒鬼薔薇少年の事件が非常に猟奇的な事件であったりしたものですから、少年非行が取り上げられているのです。その辺の考え方にちよつと慎重を要します。

たとえば、中学生がナイフを持っているなどというのは、きわめて当たり前の話で、我々、戦時中の中学生はみんな持っていた。ナイフで決闘するような時代が本当にありました。別にそれはごく自然なことで、中学生がナイフをもてあそんだり、人を殺すのを楽しんだりということが、一番端的に現れるのが戦争です。戦争中は実弾でやっていたわけで、少年航空兵になって、一番役に立つのは上級の中学生です。

どこの国でも、最も好戦的な少年の年代というのは、中学二、三年です。どこの国でも、少年兵というのが一番、勇猛果敢で、単純です。彼らは、まだちよつと現実判断ができていない年代で、生と死などということを実感できない。だから、ちよつとした英雄主義を吹

き込まれると、もう夢中になつて、命がけでみんなが戦争をしたり、兵隊になつたりする。そういう世代ですから、決して、日本の中学生だけが、異常になつてゐるということではないということを、まず考えておく必要があります。

むしろ、現代の日本の子どもを考えると、逆の視点から見ることが重要です。つまり、余りにも恵まれすぎている。余りにも親が教育に熱心すぎる。余りにも少数の子どもを大事にしすぎる。学校も、余りにも生徒の人権を尊重し、気を遣いすぎる。つまり、我々が見ていると、親の過保護によつて起こつてゐる子どもたちの問題の方が、本当はもっと深刻なように思います。

今、日本では登校拒否とか、若者の無気力状態というのが、深刻な問題になつてゐます。これは本当に深刻です。ナイフの事件などより深刻なのが、今の若者たちの無気力、引きこもりという状態です。

極端に言えば、社会で行動して、いじめだの喧嘩だのをしている連中は、まだ活力があつて生きてゐるわけです。そういうこともしないような引きこもり、登校拒否、無気力症といった子どもたちが次第に増えている方がもっと大きな問題です。これはアメリカとは対照的な問題だと思ひます。

アメリカの先生にその話をしたら、日本というのは不思議な国ですね、と言うのです。「なぜ、登校拒否で学校に行かなくなったり、仕事ができなくなつて家にいる人がそんなにいるんですか」と言うのです。「だって、早いうちにその連中は人生の落伍者になるんだから、生存競争にはつきり決着がついていいじゃないですか。なぜ、そんな怠け者だの、学校に行けない連中を国家で保護して、文部省が心配したりするんですか。アメリカなんか、ちよいどいいからお前たちはルンペンになれで済んじゃう話ですよ」と言うのです。

三十代になつても、無気力で、引きこもりの若者が今、増えていると言うと、そのアメリカ人は「不思議ですね、日本という国は。二十歳を過ぎて働かない子がいたら、アメリカではもう他人同然だから、さつさと出ていって好きにしろで、親が養うなんてことはしないですよ。皆、ホームレスかルンペンになるしかないでしょうね。親は二十歳過ぎた子どもの運命などにあまり関心がないですよ」と言うのです。

つまり、アメリカという国は、我々が想像する以上に、今でも弱肉強食の原理で動いているのです。日本のマスメディアは、アメリカの市場自由主義、この弱肉強食の原理の恐ろしさを知らなすぎるような気がします。

この間も、アメリカのピーオークリニックという大病院の事務長を三十年近くしている

私の後輩が来て、「本当にアメリカという国は恐ろしい国ですよ。さつきまで自分と一緒にずっと仕事をしていた人が、地位の問題とか仕事の都合で敵対関係になると、顔色一つ変えずに自分を陥れたり、やつついたりする側にまわる。これがフェアなことだと言って、けろつとして相手をやつついたりする国ですから」と言う。

田中角栄さんなんかは、これをやられて失脚したわけです。都合が悪くなると、それまであつた秘密の領収書、証拠物件を全部ばらされた。それまで田中角栄は、アメリカと共に謀っていたわけです。

田中角栄がアメリカにとって都合の悪い政治家だとなれば、あつさりと裏切つて落とす。お互いにこういうことを繰り返すような国です。そういう国の本体というのを見ながら、ビッグバンだとか、今の金融不安などに対処すべきだというのが、私の持論です。

話を元に戻しますと、日本では、息子さん、娘さんが三十代になつても、学校に行けなかつたり登校拒否になつたりしても、親は一生懸命に世話をしています。むしろ、こここのところに日本の親子関係の非常に深刻な問題があるのです。

どういふことかという、日本の家族は、伝統的に子ども本意の家族であると国際的に見なされています。子ども本意の家族というのは、子どもを育て、教育して、立派な人に

するということを親たちが一番の生き甲斐にするような家族です。

従来、それは日本の家族の美德でありました。たとえば、アメリカの日系一世、二世の家族のところに行きますと、二世、三世の方はアメリカで成功している人が多いのです。何が一番違うかというと、日系人は子どもの教育に大変苦労して、子どもたちをいい学校に入れるまで一生懸命に働きました。その結果、二代目、三代目がどんどん伸びて、日系人はすばらしいということになりました。

日本も高度成長期まで、このリズムで大変よい方向に動いていたと思います。ところが、最近のように子どもの数が少なくなると、子ども本意の家族では、余りにも親が子どもの教育に関心、エネルギーを向けすぎるがゆえに、いろんな問題が起こってきます。

ここに来る前、私はある某大銀行の健康管理センターに行ってきたのですが、そこで「最近どうも東大卒の人が、落ちこぼれるというか、うまく行かない場合が増えているような気がするけれども、人事部長、どう思う」と聞いたのです。その人事部長自身が東大を出ているのですけれど、「本当にそれで、私も困ってるんですよ」と言う。「どうしてだと思います」と尋ねたら、「それは、昔は東大に入るような連中は志を持っていたけれど、今はそうではないから」と言うのです。

以前は志を持って一生懸命に勉強して東大に行つて、そして立身出世をして、力を得て、良い国を作ろうとか、良い仕事をしようとかいう連中が東大に入っていた。ところが最近  
は違う。どんなふう違うのかというと、今、東大生の親の家庭が一番収入が高いのです。

前に私が東大へ講義に行つてるとき、「東大生というのは苦学力行みたい人で、私は  
慶應ですが、慶應は、お坊っちゃんというイメージがあつたけど、今は随分雰囲気が違う  
ね」と言つたら、東大生が笑つて、「そりゃ東大は、今や、親にお金がなかつたら入れない  
ところになつちやつたんです」と答えた。小さい時から、家庭教師をつけて塾にやつて、  
お金を注ぎ込んで、ありとあらゆる方法を使い、それにエスカレーターみたいに乗つけれ  
れたのが、東大に入る。ほとんど今は、東大生は中学、高校一貫教育の、たとえば武蔵だ  
とか開成だとか麻布だとか桐朋という学校の出身です。東大生の七〇から八〇パーセント  
までが、そういうエスカレーターに乗つた人です。そういう人しか東大に入れない時代に  
なつてきました。

この場合には、一つの階層ができてしまつた。しかも、そこに乗つかっている人は、お  
父さんお母さんに「お勉強しなさいね、良い子だからね」と言われて、それしか知らない  
まま銀行に行つたり、役人になつた。また役人になつてからでも、それが続いている。

それで、あの人たちがすぐくおもしろいところは、子どもっぽいいたずらをしたり、子どもっぽい遊びをしたことがないまま大人になっている人が多いということです。

今度のいわゆるお役所やエリート官僚なんかの汚職事件を見ていても、非常にスケールが小さい。田中角栄さんみたいに五億円とか十億円とかいう数字ではなくて、一晩でわずか二万円とか三万円の食事をご馳走になったという話ばかりです。

ただ特徴的なのは、非常に子どもっぽい接待でもてなされたり、ちやほやされたりすることに、すぐく弱いらしいということです。お金の額ではない。

ある銀行で、東大を出たエリートがちよつと挫折した。仕事上で失敗をして鬱病になって家にいる間に、コンピュータゲームを覚えた。子どもから教わったのです。そうしたら、病気はよくなったのに、いつになっても出社しない。どうしたんだって聞いてみたら、なんと二か月か三か月間、子どものコンピュータゲームを、初めから終わりまで次から次へとこなしていたのです。

私が出たら、「先生、僕は生まれて初めて勉強と仕事以外にこんなに人生にはおもしろいことがあると知りました。なんでもいいから、しばらく仕事を休んでこれをやらせておいて下さい」と言うのです。

今の東大生にはこういう子が多いんです。もつとひどくなると、東大に入っただけで目標がなくなって、僕はどうしたらいいのかとなる。あるいは、受験勉強ばかり良くできるんですけど、創意工夫がない。たとえば実験をやってみるとか、論文を書いてみると言うのと、全く、自発性がなくてできない。別に東大を悪く言うわけではなくて、今の親の過保護がここに現れているのです。

### 家庭教育がない！

あるお母さんがこういうことを中学の先生に言いました。「先生、勉強の方は私が引き受けますから、躰の方をお願いします」と。先生は笑っているんですけど、従来、家庭教育で躰をされた子が、ある程度、社会人として一人前になって、中学に入っていくものでした。ところが今は、家の中でしつけるといことが非常に難しくなっている。お母さんたちには、子どもをしつけるより、パートでも何でも働いてお金を稼ぐ方がずっと楽にできるわけです。お金を稼いで家庭教師をつけたり、塾に行かせることはできるけれども、躰はうまくできないから、学校でやって下さいと言う。学校の教師に言わせれば、躰がき

ちんとされた子どもが入ってくるのが前提で今の学校教育は成り立っているから、子どもを羨してくれないと学校に来てもらっても困るということになります。

皆さんはご存知かも知れませんが、今の幼稚園、小学校の子どもは、我々から見ると、失礼な言い方ですが、本当に烏合の衆という感じですよ。先生がいくら恐い顔をしたって、先生なんか恐くないっていう連中ですから、てんでんばらばらに、やっています。

今やこの傾向は、小学生だけではなく、中学、高校、そして大学にまで及んでいます。今、大学の先生たちの一番の悩みは、授業中のおしゃべりなんです。こうやって皆さんのように、私の話をアテンション・プリーズで聞いて下さるなんて大変幸せなんです。私語研究、おしゃべり研究という、こんな立派な研究が生まれて、これを教授たちが皆でまわし読みをして、どうしたらよいかと悩んでいます。

私は慶應大学で六百人ぐらいの学生を相手に講義をしています。私は、ある種のタレント扱いをされています。私だからできるので、普通の先生にはできないと言われるのですが、内容はNHKの市民大学よりもっと易しい内容でしょうか、半分くらいは映像、ビデオなどを使ったり、いろんな工夫をしています。

話を一時間以上じつと聞き続けることは、今の大学生にはほとんど無理です。がやがや

し始め、規律というものがない。授業中に、女の子が話に来て二人で連れ立って出て行ったり、後ろの方ではパンを食べたり、牛乳を飲んでいる者もいれば、途中で立ち上がる子もいます。天下に誇る慶應大学でもそうです。とにかく、ずっと下の学年まで一貫して、そのようです。これは、これからいよいよマスコミの話題になると思います。

### 恐るべき子どもたち

今は中学生ですが、多分、今年か来年にかけて、この次は小学生がマスメディアの話題になると思います。

この間も、国際フォーラムで、東京都の教職員組合の大会がありました。私が現代の教育について講演をさせていただきました。お茶を飲んでいるときに、東京都の教育長が「先生、本当にどうしたらいいんでしょう」と言う。今、東京都では、小学校の五年生、六年生の担任に誰もなりたくないと言うのです。先生のなり手がいない。上級生の小学生はいやだと。「そんなこと言ったって、担任が決まらなければ仕事にならないし、先生どうしたらよいでしょう」と、教育長が言う。しかし、それは、おたくの方の専門じゃないかと私

は思います。

これからいよいよ、小学生の校内暴力が話題になってくると思います。本当に授業ができなくなっているような状況があるようです。

一九七〇年代に、大学紛争というのがありました。話を聞くとおもしろいのですが、大学紛争の時の新左翼（ニールフト）の全共闘のお兄ちゃんたちが、教授をつるし上げた手法とそっくりなことを小学校の五年生、六年生が先生にやっているんです。必ず、理屈がある。たとえば、小学校五年生くらいになると、先生の発言は差別だとか、それはえこひいきであるとか、先生は先生としての平等性を守っていない、自己批判してくれとか、そういう形でやるんです。前の授業の時は、先生はこう言った。それは、今言ったこととは違うけど、その矛盾はどう考えているんだとか言う。

今の小学校五、六年生で、東大へ入ろうなどという連中は、塾でもたくさん勉強してまですから、小学校の先生なんて、のっけから馬鹿にしているんです。塾の先生に比べたらずっと能力が低いですから。それで自分たちが勉強したことで、あの教師はちゃんとやっているかどうか試してみようということになる。ちよつとおかしいと、「先生、おかしいじゃないか。やってみてくれ」と言う。ちよつと先生がもたもたすると、お前そんなことで教師

が務まるか、教育委員会に報告書を出す方がいいかとか言う。今はもう校長なんて全然だめなんです。教育委員会に直訴です。それをまた扇動しているお母さんがいるわけです。「あの先生、だめらしいから、ちゃんと授業を聞いていって……」とテープレコーダーを子どもに渡す。後で、お父さんとお母さんが聞いて、あの教師がこう言ってるのをおかしいよって、それを全部資料にして、教育委員会に報告し、こんな教師をどうするのかとやる。先生にすると、いつ自分が教育委員会からやられるか分からないと戦々恐々で、先生としての威厳だとか資格だとか、我が師の恩を尊敬するなどという雰囲気は、さらさらないというのが今の子どもたちの状況であると言えましょう。

そんな子どもたちが中学、高校と上がっていったら、どんなことが起こって来るだろうか。その特徴は、極端に知的な発達です。今のある種の子どもたちの知能の発達には恐ろしいものがあります。私はそういうお子さんに会ったことがありますけれど、コンピューターがあるから小学校一年くらいで、大体昔の中学三年くらいの国語力を持ち、本がみんな読みこなせるくらいの子どもがいます。

これからそういう、ある種の知能だけがものすごく発達した子どもが出る可能性がります。コンピューターを使っていますから。それでいて、いわゆる情操、情緒は全くいび

つな、今言ったように、大人を批判の対象としか見ないような、そういう子どもたちがかなり増えてくるということがあるでしょう。

この辺の話と酒鬼薔薇少年の話はかなり深く結びついています。お気づきかも知れませんが、酒鬼薔薇少年が書いたもの、読んだものは相当なものです。現代の子どもが中学一年で、これだけの本を読んだり書いたりできるかと思うような内容です。そこにまた一つの何か異常な世界があるようです。

これから、インターネットでますます情報が得られます。インターネットから情報が得られると、身近にいる人の価値は非常に減ってしまいます。知識なんてインターネットでポンと出せば出て来ますから、何も日本の先生に聞かなくても、直接パリの先生に、アメリカの先生に聞くことができる時代です。文献がどんどん出てきますから。そこで教育関係というものの基本的な見直しが必要になってきています。

同じことが今度は親子関係にも起こってきています。以前は子どもに対して情報を持っていたり、社会に対する仲介役をしたり、いろんなルールを決めたり、筋を作ったりしてやっていくというのが親の権威というものでした。けれども、残念ながら、これもまた学校の先生と同じように失われている。具体的に言うと、最近の携帯電話の普及など見てい

ても分かりますように、うちに帰ってもみんな外と繋がっている。それで、親子関係がどんどん失われていくということがあるようです。ですから、教育問題というのは子どもだけの問題ではない。社会の趨勢、親、教師と子どもとの関係のあり方に非常に深刻な変化が起こっているため、なんとかして新しい教育のシステム、家庭のあり方を再発見しなければならぬということが、今日のテーマになっていると思います。

### みんなが自分のことしか考えられない

文部省に中央教育審議会があります。中教審というんですけれど、たまたま二週間くらい前に、その中教審が今年一年間の統計をまとめて、中間報告を文部大臣に提出しました。文部大臣に提出したその時の中間報告のテーマが、「次の世代を育てる心の危機」となっています。実を言うと、この「次の世代を育てる心の危機」という言葉は私が作ったものです。

英語では、これをジェネラティビティ・クライシス (Generativity crisis) といいます。このジェネラティビティ・クライシスという英語自体、私が作ったのですが、次の世

代をつくり出す心というのが generativity で、そういう次の世代を作り出して、はぐくみ育てる心に今、危機が訪れているという意味です。中教審で委員の方々にこれをお話したのです。すると、文部大臣とか皆さんがこの言葉が気に入ったようで、今年はそれで行きたいんですけれどよろしいですか、いいでしょう、ということになりました。

この言葉を日本語にするならこれがいいということ、「次の世代を育てる心の危機」というテーマになりました。これは親の側から子どもを見ていくというものですが、そういう目で見ると、今の教育問題の背景には、もつと我々、大人の世界全体が大いに反省しなければならぬ問題があります。よく昔から、子どもは親の鏡と言いますが、今の子どもたちが持つているいろいろな問題というのは、親や教師の世代、我々の心の問題がそこにあるのではないかということです。

分かりやすい例で言うと、地球の温暖化という現象がありますけれども、おそらく我々が生きている間、地球が本当に温暖化によって水浸しになったり、南極や北極の氷が全部溶けるということはないと思うんです。けれども、それが百年、二百年先に起こるかも知れない。だから今から、産業の繁栄を少し犠牲に、エネルギーの消費を止め、飼う牛の数を減らしたりしなければならぬ。牛のゲップというのがすごくよくないそうですね。

それから、利根的な快樂主義を自己抑制して消費を減らさなければ、次の世代に、地球は温暖化して、だんだんと滅んでいくのではないかと言われています。そう言われても本気で自己抑制をして、今日から自動車に乗るのはやめましょうということを率先してやる人は誰もいない。本気ではやらない。いよいよ真剣に考えても「まあいくら考えたって百年、二百年先だから、その頃は俺たちは生きてはいないからまあいいか」というところで終わってしまう。これがまさにジェネラティブティ・クライシスなんですけれど、本当に将来どうなるかという問題はあります。

この問題に、さらに拍車をかけているのが高齢化社会の到来です。つまり、六十歳、六十五歳で適当にあの世にいくことができた時代は、我々はこの世に対して未練、思いというのが残りますから、その思いを受け継いでくれるように子どもたち、次の世代にそれを託すという心を持つことができました。ところが、幸か不幸か我々自身が、八十歳、九十歳まで生きることができるようになりましたので、後のことを次の世代に託すというよりは、むしろ自分たち自身が、どうやって老後を生き抜くかということの方が、差し迫った課題になってきたわけです。

しばしば、我々専門家が集まって、アルツハイマーとか痴呆になったとき、ある程度に

なったら、安楽死をさせてくれというような書類をまだ頭がはつきりしているうちに書いて、署名して、実行できるような法律ができないもんかなんて話をするところがあるんです。しかし、それはなかなかできない。

アメリカの老人ホームで、こういうジョークが流行っているそうです。僕の人生の失敗はたばこを止めたことだ。もしあそこでたばこさえ止めていなければ、無事に七十代くらいで癌で死ぬことができただろう。たばこを止めてしまった結果、癌にもなることができなくて、今こうやって呆けたまま、孤独で寂しい老後を送っている。情けない、これは失敗だった、というジョークが流行っているそうです。

こういうことが恐ろしくなるのは、一生懸命お金を貯め、年金をもらえる保険に入って、いくら年をとつても暮らせるようにしようという方にお金のやりくりが優先されるからです。昔のように生命保険に入って、息子や娘にがっぽりお金を残そうというよりは、まず自分の生活を先にとりようようになります。これはまさにジェネラティブ・クライシスの代表的な現象です。

このように、みんなが自分のことしか考えられないという心の状態になってきています。ですから、こういう社会的な背景も、教育問題を考えていくときに大事なことのようにです。

## マイホーム主義がもたらしたもの

戦後の日本社会というものを考えると、第一世代が我々昭和一桁くらいの大正から、昭和初期の戦中派です。こういう人たちはエコノミックアニマルになって、よい日本を作ったという世代で、一生懸命に働いた。その次の世代がいわゆる団塊の世代で、この中にもいらっしやるかも知れませんが、第一世代のお父さんたちの仕事を受け継いで、まあ一生懸命やってきた。今はその次のポスト団塊の世代です。三十代くらいで今の子どもたちの親ですが、この人たちはポスト団塊の世代と言われているんです。この第三世代になりますと、戦争前から日本の国が作り出してきた、いろんな精神力というものがもう伝達されなくなり、消費されてしまっている世代です。

つまり、第一世代は戦争には負けたけれど、なんとか復活させようと一生懸命に働いて仕事をする滅私奉公するような世代でした。第二世代もまだそういう気持ちを受け継がれていて、なんとかやっていたんです。団塊の世代というのは、ある種のコンプレックスがあつて、親のように滅私奉公したくないと、どちらかというとマイホームで楽しくやりた

いという気持ちを持つようになりました。ところが、男の人がマイホームになってきたということと、今日のような問題は大変に深い関係があるのです。団塊の世代は、自分自身は仕事、仕事でやっていました。第三世代は、仕事をするよりもマイホームを優先する世代になってきています。

この間も、NHKラジオで現代の父親という討論会をやりました。今の親たちの一番大きな問題は、子どもを育てたり、子どもを大事にしたりすること以外に、人生の生き甲斐や目標がなくなった人々が増えているということです。

これはよく分かる話です。彼らには全く天下国家の意識などありません。ただ、彼らの不思議な点は、子どもを大事にしたり、子どもと一緒に遊んだりすることが、何かとても素晴らしいよいことであるかのような錯覚に陥っていることです。

しかし、自分の子どもがかわいいというのは、欲望の最たるものであって、セックスと変わらないのです。自分の子どもがただかわいくて、よい学校に入れたり、出世させたりしようというだけでは、親が欲望の固まりになっているに過ぎないのです。今の親というのは、そういう欲望の固まりになって、しかも子どもの欲望を満たしてやるのが、一番よいことだと思つて、ほかに人生の目標・価値もないような世代に、戦後五十年の間になつ

てしまったということが言えるようです。

この間も、「この頃の親は、日曜日は一日一緒に息子と遊んだというのを自慢げに話すけれど、いい年の親父が子どもとキャッチボールばかりやって、それがなんで父親なのかね」という話になりました。父親というのは、本来はそういうものではなくて、子どもが人生において最も辛いこと、つまり自分の欲望を断念したり我慢したりすること、一生懸命に働かなかつたら生きてはいけないぞと教えるのが、本当の父親だと思うんです。今は正反対の父親ばかりになってきているのではないかと思います。

「働かざる者は食うべからず」という言葉は、社会主義の言葉で、あまりいい言葉ではないかも知れません。しかし、昔はどんな子どもだって、たとえそれが家事でも何でも、人間はどこかで働いていなければ生きていく価値はないと教わったものです。

この場合の「働く」という意味は、非常に広い意味で、何も労働するという意味ではなく、人のために何か役割を果たすということだと思ふんです。今はそういう精神というのが全く失われてしまって、伝えられない。ですから、子どもたちは、なぜ僕は学校に行かなければならないのか、あんな嫌な教師連中とどうして付き合わなければならぬのか、という気持ちになるのです。

登校拒否の子は真顔でこういうことを言います。「何で学校の先生は俺たちと同じ授業を聞いてて、給料をもらい、俺たちは一時間黙ってつまらない授業を聞いてて、何ももらえないのか。こんな不当なことは、俺は嫌だね」と。

これは現代の子どもたちの本音かも知れません。そこには、かつて人間を支配していたもの、教育とか理念というものがなくなってしまった風潮があるようです。その風潮の最たるものは、今の新聞を見ても分かることですが、とにかくビッグバンで、少しでもお金を上手に運用して、利潤をあげるのが一番いいという時代になってきたことです。昔は、こういう生き方をする人はあまり評価されなかった。やはり自分で働いて、自分で何かを作り出すということに価値があると、子どもは教わったものです。いきなり学校で、株の上がつたり下がったりを一生懸命に勉強する。他のことはいいから、それをしつかりやらないから日本人はだめだなどということは、教育しなかったと思うんです。

今、国際的に見て、日本人が幼稚で未熟なのは、株の運用の仕方を知らないからだといふんですが、つい最近までは、そんなことをやっている人は特殊なお金持ちで、我々はみんな一生懸命に働いて、そんな株なんかやらなくても給料で暮らすというのが、普通の心がけだったのです。そういう時代の変化というものが、今、急激に起こっています。そう

いう中での子どもの教育ですから、非常に大変になっていくだろうと思います。

その次の問題は、今は子どもの数が少ないために、さっきの教師についてと同じように、親を見くびっているといったら変なんですけれど、非常に小さいときから、自分がもし生まれてこなかったら、あるいはいなかったら困るのは親だということをよく知っています。つまり、自分は親にとって掛け替えのないものだとこのことを知っています。昔のように兄弟が三人も四人もいて、あるいはもつといて、一生懸命に、自分を主張しなければ、親にも認めてもらえないという時代ではありません。本当に、あらゆるエネルギーを使って、一人か二人の子どもを大事に育てるといのが、今の親たちです。ですから、子どもたちの方が王子様、お姫様になっています。彼らがすぐに気づくことは、たとえば自分がご飯を食べなかつた、食欲がないと言うと、どのくらい親がうるたえるかということです。あるいは自分が学校に行きたくないと言言つたら、いばっていたお父さんはどのくらい困るか、ということをよく知っています。これを切り札に使いながら、親を操る、動かす心がけを持っています。そういう子どもがすごく増えていきます。彼らは昔のように親を尊敬したり、親に甘えたりしません。昔の子どもは、自分がきちんとやらなかつたら、親に見捨てられるだろうという不安をもって、しっかりと育つたものです。今はなかなかこうは

いかない。それはなぜかという点、親自身が子育てを自分の目標にしてしまったからです。子どももそれをよく知っていて、それに乗ってしまう。これはどういうことかという点、もはや自分の欲望をかなえること以外に理念とか天下国家とか社会とか、より開かれた、人のためとかという世界が、親の世代に見えなくなってしまうからです。そういうことが本当にあるようです。

これはなかなか深刻です。ですから、休みで遊びに行くにしても、どこに行くにしても家族エゴイズムというのがあります。また、悪いことにみんな車でいきます。車には、自分の家族だけが乗ります。外はみんなよそ者で、車の中だけがみんな仲良く楽しくというのが家族だということです。他の家族のこと、社会のことをも、家族として考えるということ、子どもたちはあまり教えられないことがない。そういう子どもたちが小学校、幼稚園に行くわけですから、先生は、大変に気の毒だろうと思います。

## 歴史教育の必要性

そこで、中教審で私が言ったことは、次のようなことです。

教育の改革で抜本的に大事なことは、まず幼稚園、小学校教育で思い切つて子どもの数を減らし、十人、二十人の小集団にして先生がつく。あるお母さんが言ったように、まず知識の教育ではなくて、躰あるいは人間関係、それから我慢することを教える。人格形成をゆつくりとやっていく。それを学校で担っていくしかない。他の社会ではやる場所がなくなっている。それこそ、国が真剣にやるべきところではないかと言っているのです。

今、少子化のために、むしろ教室の数を減らそうとか、教師の数を減らそうという方向に向かっていますが、そうはしない方がいいと思います。子どもの数が減つた分だけ先生の数を増やして、少数教育で家庭教育の代わりをしていく。

第二に、先生自身がもう一度、教育理念とか、教育というものの意味を考え直すということが必要です。

今の小中学校は、ある意味では、会社よりも管理社会です。しかも、非常に狭い管理社会です。少し有能な先生は、どこかの小学校、中学校で校長になり、やがてローテーションしながら、よりよい中学校、高校の校長になり、やがては教育委員になり教育長になる。これが一つの先生の道筋です。結局、そんなことばかり考えているので、本当に子どもと一対一で向かい合うということが失われている。その辺についても、改革をどうやるのか

という問題があるようです。

家庭教育については、これから新しい父親の役目をどうするかということが問題です。共働きがこれからどんどん増えていきます。お母さんが働きながら子どもを育てていくために、育児をどうしていくかということが、具体的にいろいろとテーマになっていくようです。そして、今は、国際的にそうだし、私も言っています、育児については、集団保育をした方が社会性が子どもの身につくのではないかとということで話題になってきています。

一人か二人の子どもと、お母さんが狭いマンションで暮らしているのを密室保育といいます。子育ては、ただお母さんがそばにいればいいというものではない。そういう所では、教育機能はほとんど失われています。むしろお母さんも仕事をし、昼間は、子どもは集団で暮らすような場所に預ける。集団教育を早い時からやっていった方が、子どもの教育はうまくいくのではないかと思えます。これは世界的に視点が変わってきています。日本ではむしろ具体的にそういうことをも考えて、教育を新しく見直していくというようなことがあります。

最後に、教育問題で少しお話をしたいことがあります。日本の場合、歴史教育が非常に

曖昧になっていることが、教育上の大きな弱点になってきていると思います。今の小学校では、まごまごしていると、昭和時代のことについて、歴史の教育をほとんど飛ばしてしまふ先生が非常に多い。うまく話ができなかったり、うっかり話すとまたどこかの母親に訴えられたりするので、この部分はなるべく触れないでおこうという傾向があります。

難しくいうと、教師が自分の国とか、愛国心とかを考えたり言ったりするのは、困るところで、危ないことだという気持ちだが、特に教育界には根強くあります。これは太平洋戦争の敗戦の傷跡が、まだ日本の国には残っていて、この傷が子どもの教育にもすごく影響していると思うのです。文部省の中教審ではないのですけれど、この前、ある少年の非行とか何かの委員会で、ある先生がこういう発言をしました。

今の子どもたちに欠けているのは、正義の観念だ。たとえば、いじめ。誰か弱い子がいじめられている。それをみんな傍観している。誰も身を捨てて助けようという子がいない。これが、今の子どもたちのいじめの深刻な問題だ。どうして、そこに正義感を持った男がいて、勇気を持って助けようという人が現れないんだらうか。今の子どもたちはもつと個人主義で、自分さえよければいい、あるいは自分が被害を受けなければよいというふうに考えている。では、もつと、学校でそういう時は、正義を持って悪い奴をやっつけろと教

えられないのか、という話です。

六十代くらいのも、ちょうど私ぐらいの教育長やその年代の人が、「先生、それはまずいんです。戦後教育では、正義という言葉はタブーなんです」と言う。何でタブーなんだろう。それは戦争中に、正義のための戦いと言った軍歌を思い出してご覧なさい。みんな正義のために、「敵は幾万有りとても」などと云って戦争をやっていたわけですから。

正義という言葉は悪用されて危ないから全て使うのは止めましょうと言つて、いつの間にかもう五十年経つてしまった。結局、学校教育では今でも正義はタブーです。

昔はよくチャンバラ映画とか、やくざ映画では、正義感の強い男が出てきたものです。鶴田浩二や長谷川一夫だとかが、悪い奴をやつつける。悪い代官をやつつける正義の鞍馬天狗みたいなんです。今は全くそういうものはなくなつて、そういう時には自分は関わり合ひにならなければいいと、誰もが言つて身を引いてしまう。

何とかして正義の観念を復活させる方法はないか。同じことが愛国心とか、そういうものにも言えます。日本の英雄像というものについても、この間おもしろいことがあります。朝日新聞で、久しぶりに東郷元帥を取り上げたんです。これは朝日新聞としては画期的なことだと思いますけれど、二、三の教科書でようやく東郷元帥を教科書に載せたとい

うのです。やはり戦時中の軍国主義の時代の英雄を見ると、東郷元帥が一番無難なんですよ。

日本海海戦で敵を打ち破った英雄として、東郷元帥は非常に国際的に評価の高い人です。私はかつてウィーンに行ったときに、タクシーの運転手にいきなり「東郷、東郷」と言われました。何のことかと言えば、ロシアのバルチック艦隊を打ち破った東洋の英雄だと言う。今でもヘルシンキに行きますと、スーパーにアドミラルというビールがあるんです。

アドミラルというビールの商標を見ると、なんと東郷元帥が付いてる。

フィンランドに行くと、東郷元帥は帝国主義ロシアを打ち破った東洋の弱小国の英雄だと、今でも尊敬されている。日本では、今まで、子どもにそういうことを教えることができないという不思議な状態でした。

私はある本を書いているんですけど、その中で、日本の歴史教育は、アメリカ側から日本の歴史を見ることを強いられていたのを全面的に転換して、日本の側から日本の歴史を見るといふふう大幅に視点の転換を図って、主体性を回復しなければならぬと書きました。そうしないと、今度のビッグバンで、本当に日本はアメリカの第二の植民地になってしまう。今のままでいくと、すべての日本の土地や、いい物件や企業は全部、アメリカ

力の商會に買収されて、いよいよ五十年経つて、アメリカの日本占領は達成されたとなる恐れがある。だから、全面的に日本の主体性を回復するということが大切だと書いた本が出るので楽しみにしておいてほしいのです。しかし、決してナシヨナリズムだとか、軍国主義になるということではないのです。

日本の国の歴史をきちんと教える。今の日本は記憶喪失症の国みたいですよ。戦時中のところだけ全部記憶をなくしている。そうではなくてやはり、過去と現在をつなげる。それがきちんとできていないために、どうも学校の先生たちはどこか、子どもたちに対して自信がない。親たちは、子どもたちに対して、何か、しっかりとした社会人としての態度がとれない。これが心の背景にあり、親になると、いよいよ三代目になって、子どもたちに顕著に現れてきています。そのため非常に社会性の欠けた、自分中心主義の子どもであったり、無気力な子どもであったりするという状況があるのではないかと思っています。

少し時間を超えてしまっているようなので、あとは対談の中で、いろいろとまた具体的な考えをお話ししたいと思います。



小此木先生に聞く

聞き手・真言宗大覚寺派宗務総長

廣安 俊道



廣 安 大変貴重なご講演をいただきました。今日のさまざまな社会現象、社会病理の

把握の仕方をお話しいただいたと受け止めさせていただきました。

いろいろなことを考えてみますと、日本は、アメリカよりは平和でましというお話でしたが、それにしても、あまり私たちが今までの社会では経験しなかったような、憂うべく状態が今の日本にはあるわけです。

仏教の教えにはいろいろなバックボーンがあり、その一つに学派というものがあります。思想の大きな流れには、如来蔵思想というものもあります。『如来蔵経』というお経には、「衆生達、つまり諸人達は、常に如来の仏様の子をそのうちに蔵している」ということが見えます。それから『華嚴経』では、ちよつと読んでみますと、「なんと彼ら諸人達は私とそつくりではないか。そこで方便手だてを巡らして、その呪縛を除いて彼らの内なる仏の知恵を働かしめる」という文句さえ見えるわけです。私の心得ておりますところでは、そういう教えに従いますと、人間の心の底に如来さまの性がある。その上に、遙か彼方から、その如来の性を汚してきたり覆ってきたりしたものがあると受け止めています。

そうすると、果たして人間が、いい方向から輝きだしていくか、汚れたものに沈んでしまふかということになるのですが、先生のお立場からはそういうことをどうお考えいた

きますか。仏教の根本に触れることになるのですが、最初にお尋ねさせていただきます。よろしくお願い致します。

### 小此木

今のお考えを本当によく理解できるかどうか分からないんですけども、心理

学、精神学の研究とか、人間理解ということに絞って考えると、人間には自然本来の営みがあり、心があるわけです。しかし、今の時代は自然の心のあり方が發揮できなかったり、歪曲されてしまうということが本質的な問題としてあると思います。たとえば、ジェネラティブティ・クライシスということを言いましたが、本来、自然のままであれば、人間はとにかく何千年も何万年もずっと種族が続いていたはずなのに、今、それが何やら危なくなってきたいます。自分をよりよくしようと思ったり、よりたくさんの欲望を満足させようと欲望を際限なく広げていったところ、人間の知恵が造ってきたいろいろな文明のせいで、結果においては、本来の自然の心というものを見失ってしまった。親子でさえ、心の関わりができなくなってくる。日本の場合にはそれこそ、親子、特にお母さんと子ども、セックスを含めた男女の性的な愛情も、全部大変に衰弱しています。衰弱したというか、自然本来の心の動きというものが本当に見失われている。そう考えたときに、今のお考えのように、本来の姿に立ち戻って一度見ていくということはとても大事なことだとは理解

します。

廣 安　それが一つの肉体の現象みたいなものとして現れてきますと、宗教的に言いますと、信ずるとか、修練練磨するとかいう方法でその歪みを治していくということがあります。先生のお立場からですと、もしも病的になつた場合、そういうものを治す方法は、やはり個々に違うのでしょうか。それとも何か、治し方の原理みたいなものがありますか。

小此木　私たちは、それぞれに、集団というよりは個々の人の相談とか心の治療をやっています。その時のことを申し上げると、具体的に言えば、自由連想法をやります。自由連想法というのはどうかということ、患者さんが連想して、後ろで私とその連想を聞くのです。頭に浮かぶことを何でも、良いことも悪いことも世の中の価値判断を一切加えないで、浮かんだままに話して下さいとお願ひします。ところが、人間は簡単にそういうことができないのです。常に思慮分別をもつて暮らしていますから、いきなりそういうものを超えて自由な、心に浮かぶままの状態になりなさいと言つても、なかなかならないのです。でも、繰り返しているうちに、だんだんそういう心の状態が現れて、言葉にできるようになつていくのです。今言つたように、いろいろな世の中が考えていることや生きていくためのことから、一度自由になつて、自然の心そのものを本人が体験できるように

状態になっていく、という治療の仕方をしています。治療法を具体的にいうと、そういうことにつながるでしょうか。

**廣 安** 少し具体的な話になりますと、私の知り合いの女性で、小此木先生にご指示を仰いだこともありまして、広島島の衣笠先生の方へ移らせていただいた方があります。京都大学へ行っていたのですが、途中で挫折して自殺したくなったという話で、剃刀の幻覚が出てきたりして、ずいぶんと悩んだ女性なのです。

自殺したくなる少し前段は、一年に数回くらいの割合で、何か、非常に感情が高ぶってきて、自分でもどうしようもなくなり、自分が分からなくなる。家庭でも、親がその人を抱えてうろうろするといふほどの状態が起こってくる。

私もその人の人生をさかのぼって、お互いに工夫しながら探っていきますと、こんなことがあるのです。お母さんはキャリアウーマンで官庁勤めをしている。お父さんも官庁勤めですが、今はもう定年退職するくらいです。

ですから、小さな時分に、今で言いますと〇歳から、というような保育園に預けられました。お母さんが近くにある役所から駆け込んできて、自分の子どもに授乳をしていた。

私が聞いたところでは、二歳になるかならないくらいで、ベッドに寝かされていた記憶

があるということです。その人一人だけではなく、複数の子どもが寝かされて、上を見ている。そうすると、自分の大変好きな顔と嫌いな顔が分かったというのが、私が尋ねた限りではその人の記憶が一番とどくところで、そこから先はもう分かりませんということでした。先生のご著作に見えます、無意識の時代というのは人生にかなり影響するんではないか。

**小此木** 人間の記憶が、生後どのくらいまで回想できるかという話ですね。今は二歳半ぐらいの時の話ですが、大体ぎりぎりそんなところでしょね。その位の記憶というのは多分、断片的なイメージみたいなものです。ずっと回想できる記憶というほどのものにはなっていないと思います。だから後で、それをあれはこういうことだっただろう、ああいうことだっただろうと再構成することが、記憶になると思います。むしろ大事なことは、その記憶を思い出して話をするということが、どうしてそこで起こっているかということですね。そこに、その人の何らかの体験が反映されていると思うのです。ですから、今の記憶がどういうことを意味していたかという点、今心に残るのは何かその時からすでに良い顔と悪い顔の区別がつくようになったということです。精神分析からいうと、生後二歳半というのは、十分にそういう区別がついている年代です。特に二歳半というのは一番そう

いうことについて先鋭な意識を持つときです。

どういうことかという、たとえば、同じお母さんでも、良いお母さんと嫌なお母さんがいるわけです。つまり、自分のことを大事にしてくれたり、甘やかしてくれたり、おっぱいをくれたりして、かわいがってくれる良いお母さんと、怒ったり叱ったりする怖いお母さんがいる。両方とも同じお母さんだけれども、多分、その人は何かそういうことの区別がついて、どちらもお母さんだと感じていたと思います。良いか悪いかがあるということは、同じ顔に良い顔と悪い顔があると言っているのですから、どちらも同じ顔だということ意識がすでにある。その中に良い面も悪い面もあるということ、そこで体験できたのだと思います。

**廣 安** いろいろ時間をかけて聞いてみますと、自分のお母さんが何時間おきかに授乳に来ていた。お母さんの顔はおそらく良い顔に見えた。ところが保母さんの方は……。そこはキリスト教系の保育園で、頭にベールを被った修道尼はあまり良い感じはしないとか、保母さんに対してはもつと違った感情を持っている。そういうことをこもこも言っておりました。

**小此木** やはり、自分のことを養育してくれる人、大きな意味ではお母さん、お母さん

の代理というものについて好きな人、嫌いな人、良い人、悪い人、ということを経験して  
いた時の記憶でしょうね。

**廣 安** お母さんに対して、その時分から始まったかどうか私には分かりませんが、  
も、何か良い子でありたいというような気持ちが大んだん鬱積して、保ちきれなくなつて、  
時々爆発する。衣笠先生に出会って治療を受けるうちに、今になってその爆発が起こるの  
ではないかと分かるようになってきた、と言うのです。

**小此木** 衣笠先生は私のお弟子さんでもあります、日本でも有数の精神分析の先生で  
すから、そこで非常にいい経験をされたんじゃないかと思えますね。

**廣 安** その女性は、今はほとんど良くなりました。良くなりましたけれども、社会生  
活を送る上では人間関係が大変難しいんです。私が今日まで知っておりますのに、三つく  
らい職を変わっています。京都大学へ行くくらいですから、法律家になりたいと言つて、  
弁護士になる勉強を続けています。本人もそういう方面なら行けるのではないかという希  
望を最近になって持ち続けているのです。それが、先生のご紹介で衣笠先生にお世話にな  
った人です。

そういうことを私も経験させていただく間に、無意識の時代というのは、人生にかなり

影響するんではないかということが、少しずつ分かってきたような気がするんです。と言いますのは、よく考えてみますと、私たち僧侶には、先ほど先生のお話にありましたように、いろんな社会現象が起こつてきまして、今すぐ直接タッチできるようなことと、そうでないことがあります。宗教家がそれにタッチした方がいいというようなことは言われても、習慣とか、立場上、たとえば病気のアフターケアということになりますと、普通こういう格好をして病院に行きにくいという状況があります。そうしますと、なかなかそういうところでは実が上がりません。

私たちは今でも、少し郊外とか田舎へ行きますと、庭石をつたって、各お家の中へあつかましく、当然のように入り込むわけです。そうしますと、プライバシーにかなり深くかわることができません。ですから今できることというのは、家族のあり方や育児のあり方、老後のあり方とかいうことに、その気さあれば深くかわつていけるといふ気がするんです。そのあたりで先生に、いろいろ、ご教授いただければありがたいと思います。

**小此木**　ホスピスとか、死の臨床という言葉がありますが、癌で亡くなるのが分かっていられる方に、宗教家がいろんなお世話をされます。その場合、しばしば言われるのは、牧師さんが病棟に行つても、それほど不自然ではない。ところが僧侶の方が病棟に行くと、

どこで誰が亡くなったんですかというイメージがある。ここをどう考えたらいいかということが、しばしば仏教関係の方が社会の中で精神的なお仕事をしていただくとき、問題になります。これは古いイメージがそうだからと思うのです。実際はそうではなく、お弔いのことだけではないのですが、日本では何となくそこに結びつきます。個人的には、当事者の意識の変化を待つて、そのままやっていらして一向にかまわないことではないかと思つています。

もう一つはやはり、そういうお仕事の場合、当事者である患者さんとかクライアント側は、宗教について、あるいはものの考え方についても、それぞれに違ふと思うんです。仏教の方もいけば、キリスト教の人もおられる。ですから、ホスピスでも、それぞれの宗教の流れにあう先生とか、病院を選ばれる方がよいということがあつてしょうね。ただ、そう決めるというだけではなく、私は本当は本質的にはそういうものを超えて、その人のかにかかわれるというのが理想かなという気がしています。そういう普遍性がありますから、各宗教家の方が、そこをしつかりとご理解いただければ、たとえば仏教の方がキリスト教徒の方でもかかわれる部分があるのではないかなという気はします。

廣安 それと、合わせて申し上げたように、家庭の中での躰というような意味ではお

役に立てるかと思ひます。

**小此木** 要するに、宗教家の方が家庭を訪問することが多い。これは、そういうお仕事としての伝統を持っているということ。そういう意味では訪問による精神面での指導は、生かし方によつては非常に重要だと思ひます。

たとえば、宗教家の方には、我々のような精神科へほとんど受診しないような患者さんを見ると、宗教家の方には、我々のような精神科へほとんど受診しないような患者さんを見るという時間とゆとりがあります。精神科の場合ですと、ソーシャルワーカー、社会福祉士の方に行つてもらつて代わりをしていただくとか、あるいは保健所ですと保健婦さんがそういう仕事をしています。心のことが本当に分かる方で、訪問による指導ということが出来る方は、非常に重要な役割を果たすと思ひます。

そういう意味では今のお立場をうまく生かしていく。特に訪問すると、個人だけではなくてその家庭全体が分かる。病院に、患者さんが一人で来た場合に比べると、家庭全体をつかむことができるということは、すごく大きなメリットになるのではないのでしょうか。

**廣安** 家族のあり方とか、家族構成、たとえば、乳幼児の養育ではかなり問題がありそうだと、そういうことも、気をつけていけば察知できるということもあります。

**小此木** アメリカでは大変ひどいんですけれど、日本でも、乳幼児も含めて、ぼつぼつ

子どもの虐待という問題が起こってきています。これは家庭訪問してみると、雰囲気は何となく察知できるということがあります。

**廣 安** 今度は人生の後の方の話になりますが、私たちは同じ別れといっても、大変深刻な別れに立ち会っています。先生のご著作にもありますように、悲しみの仕事という点で、私たちには残った人の心の傷を癒すという大変大事な仕事があると思うのです。今は他の誰もできないという状態でも、僧侶ならば、しげしげとその後も儀礼として遺族の方の所へ行くわけですから、それを生かすという点で、先生のお立場から一つお教え願いたいのですが。

**小此木** 仏教の場合、まずお通夜があつて、お葬式があつて、初七日、四十九日といういろいろありますね。習慣というのは、残された人の心を世話していくときには、大変重要な役目を果たすと思われれます。

私の方で見ているところでは、配偶者を失った方が平常の精神状態に戻るのに、どんな人でも、大体二年くらいかかります。二周年というのは三回忌です。私は三回忌を目処にしているのです。昔は一年と言われましたが、残った人が高齢者になると、もう少しかかります。こちら年代が上になつてきたので、私もそういう方々のお世話をして、随時、お会

いしながらサポートしていくことが多いのですが、私はこの領域は、僧侶の方が仕事をされるべき非常に大事な領域だと思っています。

**廣 安** テクニクなどと言うと言葉が悪いかも知れませんが、その癒し方についてお教えいただけませんか。

**小此木** 一番大事なことは、はっきりこう言つてあげることです。どんなに良い人でも、愛する人を失つたら二年間は仕方がない。つまり、二年間は普通の精神状態に戻れないのが本来の姿です。それこそ自然なのです。それが自然の心のあり方だということをよく納得してもらうことが大事です。それを早く卒業しようと思つて、いろいろな手練手管でそれを楽にしようと思うものですが、本来はそういうものです。むしろ、その間に、自分の心のあり方、移り行きをじつと体験する。その間に亡くなった人のことを思い出すこともあるでしょう。昔のことをあまり良くなかつたと悔やんだり、償つたりすることもあるでしょう。残された人と一緒に、そういう気持ちをたどつていくことをしてあげることが、一番大事な役割になると思います。

**廣 安** こちらがいろいろ指示をするというよりも、聞き手にまわる方がいいということですね。

小此木　できればそうです。できれば。

廣　安　自分のことをいうのは変ですけれども、私の知っているお母さんで女手一つで、息子さんを一生懸命、経営者に育てたという人がおられるのですが、その息子さんが四十八で亡くなりました。そのお母さんが、悲しくてたまらないから継続して拌みに来てくれということになりました。それから、何年も何年も拌みに行ったのですが、御霊を拌んで後ろを向くと、私の息子だけがどうしてもこんなことになるんでしようかと言う。それを決まり文句のようにして言うわけです。私はそこで、ダケ病という言葉を作り出しました。十三年くらいかかって、やっと「だけ」という言葉が、そのお母さんからなくなったという経験があります。

なぜかと言いますと、その人は新聞が来たら死亡広告を必ず見る。それで、十三年くらいしますと、死んだ息子が生きていたら、六十いくつになっているはずです。そうすると、経営者のような人が次々と亡くなっているということがやっと分かってきた。やはり、こういう例が他にも常にあるということが、次第に分かってきて、「だけ」という言葉は使わなくなりました。

小此木　今のお話にありましたように、一緒に拌んであげるといいうか、ご供養というも

のを我々は「無の仕事」と言います。仏教の場合には、いろいろな、なさり方がたくさんおありじゃないかと思えます。いろんなご法事というものが節目節目になっていて、すぐよくできているという感じがします。やはりこれからは、高齢の方々の問題というのは大変大きなテーマになってきます。

**廣 安** 特に高齢化社会になりますと、二人揃ったままで高齢を迎えるという場合も出てきます。高齢になってから片方が欠けますと、悲哀の度合が大きくて、肉体に障るくらい、深刻だと思えます。

**小此木** 医学的な研究ですが、六十代を過ぎ、さらに年をとっていけばいくほど、一方の方がお亡くなりになった場合、残った方が体の病気になってしまふところまで悲しみが影響してしまう頻度はずっと高くなります。無意識に、後を追いたいという方も結構います。残られた方の世話が一番、精神的には大変です。

**廣 安** 私たちの立場でかかわる現実を申し上げました。もう一遍繰り返して先生にお尋ねしますが、家庭のプライバシーにかかわることができるといふ点では、〇歳からの子どもの育児に私たちはかかわることができると思えます。尋ねられる場合は別として、特に私たちが育児の問題に側面から協力するなら、具体的にどういふことが考えられますか。

小此木

今の場合、かわるのはお母さんということになります。育児をしている母親にとって一番大変なことは、孤立感を持つことです。たとえば、夫も忙しくてあまり構ってくれない。最近では、実家も遠いことが多い。子育てについて誰も味方がいない。子育てというのは今の若い女性には大変なストレスですから、せめて、ストレスになつていて悩みを聞いてもらえる人が一人いるだけで、すごく違います。まず、そういう役割をしてあげると考えるのが一番よいと思います。

いわゆる、子ども殺しの精神鑑定がありますが、おもしろいというのは失礼な言い方ですが、圧倒的な理由は孤立感です。夫が省みない。ひとりぼっち。特に最近の母親は精神的に弱くなつていきますから、そこを支えてあげる。孤立感が一転すると、虐待とかいじめになる。ですから、そのところを支えるのが一番大事な仕事だという気がします。

廣安

母子分離ということについてはいかがでしょう。

小此木

これは前半の私の講演に繋がりますが、日本の子どもは、アメリカの子どもに比べると分離が非常に悪いという特徴があります。なぜかという点、お母さんたちが一生懸命に、子どもを追いかけているからです。むしろ、子離れが悪いといつてもよい。子離れ、親離れの両方が悪いです。アメリカのお母さんみたいに、私は好きにやりたいからあ

んた早く離れて好きにやってくれ、という態度をとるまで、なかなか割り切れません。いつも子どもを優先して子どもを心配しているのがお母さんです。そのお母さんの子どもですから、子どももなかなかそれから抜けられない。そこが日本の親子関係で一番重要なテーマになりやすい点です。

**廣 安** 俗な言葉で、臍の緒がつながっているということをお願いしますが、その場合、男の子と女の子では違いますか。

**小此木** 原則的にあまり違いはないです。男の子の方がよけいという考え方もありますが、最近はそうでもないです。一卵性母娘という言葉があつて、お母さんと娘がぴったりというのもあります。それから、一方では、冬彦さんと言つて、お母さんから離れられない息子がいます。この二つが相当に深刻な問題だと思ひます。

**廣 安** 今ないし、これからの男性が弱体化する原因の一つがそういうことになりませんか。

**小此木** 既に極めて大きな要因になつていふと思ひます。やはり子どもがお母さんから離れて、特に男の子は父親の方に行き、父親をモデルにして、子どもの世界に行くということが大変難しいようです。

廣 安 私事ばかり申し上げるようですが、私は家庭裁判所の調停を少し勤めたことがあります。調停の百パーセントが離婚です。この人たちが、本当に別れていかなければならないのかどうかという見極めをしますのに、その人をずっとさかのぼって、その人がお母さんのお腹の中にいるときから四、五歳までどういう環境であったかというようにことを探っていきますと、やはり人を包み込むというような愛情が何となく分かっていないということを感じます。

小此木 それはおっしゃるとおりだと思います。

廣 安 これでは、たとえ子どもをもうけてもだめかなあと感じます。

小此木 私はそれを研究しています。今、子育て困難症候群といまして、子どもはできただけで、なかなか子どもを育てることができないという人がいます。大体、百人に四、五人いますね。それを発見するために、いろいろな心理検査を作りました。それを三歳検査とか、一歳半検査でやって、問題のありそうなお母さんをご相談してみると、みんな非常に育児に困っていらつしやいます。そういう状況があります。これも、先ほど申し上げたジェネラティブティ・クライシスの一つです。お母さんが母親らしくなれないのです。

廣 安 これでお話を終わらせていただきます。私のお尋ねの仕方によって、皆さまの

ご期待にお応えできたかどうか分かりませんが、お許しただきたいと思えます。  
先生、今日は大変有り難うございました。

## あしがき

昨年、本会の講習会のために、禰宜田会長と共に小此木先生の研究室を訪れた。

未成年者の犯罪が多発し、また凄惨なものとなるにつれて、私たち宗教者も考えなければならぬ問題だと感じ、専門家に意見を求めに行ったのである。

教育評論家等の意見もマスコミを通して多く聞いた。子どもの世界と大人の世界が軋み始めたという印象をもった。学級崩壊という言葉に表されているように、教育現場では大人の側に困惑が現れている。このような状況を見て、本会でも現在の子どものありようを見直そうということになり、小此木先生に講演を依頼することになったのである。

「キレル」という言葉は流行語のようになったが、本冊子を刊行しようという頃には余り聞かれなくなった。しかし、NHKのラジオでは、子どもの教育相談は絶えることがない。これらの相談に対して、多くの場合、大人の側に問題があるというケースが多い。そこには、成長していく子どもの心を忘れた、大人の身勝手が言葉の上にも現れている。私たちは宗教者が考えなければならぬ点は、まさに、この忘れられた成長していく子どもの心を

どう育てていくかである。さもなければ、「キレる」という言葉が単なる流行語であるとしても、また異なつた言葉で子どもの問題が俎上にのぼることになるのだろう。

お大師さまが教育に熱心だつたことは、すべての人に開かれた学校を創られたことでも理解される。三界の衆生はみなわが子であり、四海はみな兄弟であるという言葉を忘れないうようにと、お大師さまは私たちに教えられた。

今、教育のあり方が問われている。そして、私たち宗教者も、同様に問われているのではないだろうか。現代を映し出す現象を見て、自らを見直す機会としたい。その意味においても、荒廃している子どもたちの世界を、私たち大人がどのように軌道修正すべきなのかを考えていきたい。

最後に、本書の刊行に当たり、小此木先生と廣安宗務総長にお礼申し上げます。

合掌

平成十一年三月

三矢 弘文

講師略歴 小此木啓吾（おこのぎ けいご）

昭和五年（一九三〇）、東京生まれ。慶應義塾大学医学部卒業。

慶應義塾大学総合政策学部教授、東京国際大学人間社会学部教授。医学博士。フロイト研究、精神分析学を専門とする。

主な著書に『モラトリアム人間の時代』『「本当の自分」をどうみつけるか―映画でみる精神分析』などがある。

サーガラ叢書 5

キレるの背景 現代の子どもの心

平成十一年三月三十一日発行

発行所 真言宗大覚寺派青年教師会事務局

京都市右京区嵯峨大沢町四

大本山 大覚寺内 〒616-8411

電話 〇七五(八七一)〇〇七一

編集協力・制作 銀匙社



サーガラ  
叢書 5

真言宗大覚寺派青年教師会